巻　頭　言

睡眠と生物時計の理解に向けて

高橋敏治
法政大学文学部心理学科

本年度の日本時間生物学会第14回学術大会は、東京新宿の京王プラザホテルで開催されます。今回は日本睡眠学会と共同開催の形をとり、久しぶりに時間生物の研究者と睡眠の研究者が一同に会することになります。1995年に生物リズム研究会と臨床時間生物学研究会が合併して本学会が設立され、この10年あまりの流れの中で時間生物学分野では生物時計の世界をリードする遺伝子や分子生物学の研究の成果があり、一方で睡眠研究分野では睡眠時無呼吸症候群をはじめとした過眠症などの爆発的な臨床患者数の増加による社会要請の変化があります。両者はそれぞれ研究発展を遂げているわけですが、学術大会参加数を見てみると徐々に本学会から睡眠学に関連した時間生物学関連の発表が少なくなっている傾向にあるのも事実です。今回再びこのような2つの学会がジョイントしてお互いの現状を認識し、新たな発展を目指すことは非常に意義があります。このお互いの研究現状を再確認する意味合いを込めて、合同学会のテーマは「睡眠と生物時計の理解に向けて」とさせて頂きました。今回の合同学会では、11月7日に時間生物学会プロパーのシンポジウムが4セッション、11月8日に時間生物学と睡眠学の共通する話題のシンポジウムが6セッション、11月9日に睡眠学のシンポジウムが6セッション用意され活発な討議がされる予定です。さらに日本時間生物学会主催で大塚邦明会長のもと、世界時間生物学会連合（World Federation of Societies for Chronobiology：WFSC）の学術会議である国際時間生物学会（World Congress of Chronobiology：WCC）の第2回大会が11月4－6日に同じ東京京王プラザホテルで開催されます。このためWCCに引き続く2日間は一部のシンポジウムにおいてオーガナイザー、座長および演者の先生方に英語での講演をお願いしました。国際的な交流をますます深めて頂ければ幸いです。これらの企画は、本間研一日本時間生物学会理事長と大川匡子日本睡眠学会理事長の緊密な連携、そして両学会理事の方々の協力なくしては出来なかった企画です。その労に改めてこの場を借りて感謝したいと思います。今回は、多くの会員数をもつ日本睡眠学会と同時開催のため、大会抄録を医学情報　大学病院医療情報ネットワーク（UMIN）を用いて提供させて頂きました。この中では、新しく英文の表題と日本睡眠学会に準じた動物実験規則や臨床実験倫理規定を簡単に記して頂く欄を設けました。後者に関しては、学会員全体への周知徹底という点で事前のアナウンスなどが不足し、会員の方にご面倒をおかけしました。しかし、現在の研究に対する社会的時代的要請に答えるためには、今後もこのような準備が必要と考えられます。時間生物学のような学際的な分野では、バクテリアからヒトを含めた哺乳類まで対象がさまざまであり、研究母体も理学系、医学系、農学系からさらに数学系、人文系、社会学系などが加わるため、一歩踏み込んで学会として倫理面の体制を確立することが課題であると思われます。

時間生物学と睡眠学のそれぞれのトピックス、そしてその共通する問題点を見出すことのできるまたとない機会です。決して消化不良とならないよう、またゆったりと議論できるよう準備させていただきますので、是非多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。